
記憶屋

椎葉奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶屋

【Nコード】

N5434C

【作者名】

椎葉奏

【あらすじ】

あなたに消したい記憶はありますか。あなたに思い出したい記憶はありますか。あなたに変わってほしい記憶はありますか。東京の隅のそのまた隅にあるなんてことない建物。そこは、『記憶』を扱う店、記憶屋だった。

1章 日常

「記憶とは、酷く曖昧なものだ」

彼は淡々と語る。

「思い出そうとしては忘れ、忘れたいと思っても忘れられない。大事な記憶もそうでない記憶も等しく、だ。いつしかそれが本当だったかさえ、分らなくなってしまう」

語るものに背を向け、全てを拒絶するようにして。

「だが」

「記憶は性格を、人格を形成する。失敗の記憶から成功を学び、傷ついた記憶からはトラウマを呼ぶ。記憶を改竄するということは、その人物の人生を捻じ曲げると言っても決して大袈裟ではない」

「忘れるな。俺達はそういう事をしているのだと」

誰も、彼のことは分らない。

あなたに消したい記憶はありますか。

あなたに思い出したい記憶はありますか。

あなたに変わってほしい記憶はありますか。

「もう少し、かな」

夕暮れが空を赤く染める東京郊外の名も知れぬ小さな町。それがこの水森町だ。その更に狭い路地の一角に立つ二階建ての建物がある。特に新しい訳でも寂れている訳でもない、ごく普通なもの。それゆえに気を掛けていなければ途端に日常に埋没してしまう、そんな建物だ。

その建物の二階・台所で葉月^{はづき}凧砂は底の深い鍋を掻き混ぜながら、味見をしていた。

十代後半の割に平均よりも少し低めの身長、あちこちに自由に跳ねた茶髪の髪は元々の顔つきと相俟って幼い印象を与えていて、コンプレックスを持っている。

シチューの味を調整しながら、ふと壁の時計に目をやる。時刻はまもなく十八時になるうとしたところで、少しすれば騒がしい声とともにお腹を空かせた同居人が帰ってくるだろう。そう思いながら再び味見をしようと小皿を取り出した。

「どうかな……」

「丁度良いと思うぜ」

「そうですか……って、ええっ！」

お玉を持ち上げたところで漸く自分の背後に人がいるのに気付いた。胸に落ち着けるように手を置くと、凧砂はゆっくりと振り返った。

そこには、小皿を手にとった青年が面白そうな笑みを浮かべ、青いコンタクトレンズの入った瞳を細めている。銀髪の髪に片方だけの三連ピアス、服にはチェーンが付いていて何処ぞの不良かと見間

違えるが、風砂にとって良く知った人物だった。

「詩冬さん」

「よう、風砂君。丁度通りかかったもんだから、勝手に入らせてもらった」

あのへんからな、と冷蔵庫の隣の壁を指差しながら尊大な口調で言った。この青年 詩冬蒼一はいつもながら神出鬼没だ。風砂はあ、と嘆息して少し呆れた表情をしながら蒼一を見上げた。

「いつも言ってますが、入り口から入ってくれませんか」

「普通に入るとあいつに逃げられるじゃねえか……そういえば、零堵の奴は？」

「部屋で寝てると思いますけど……」

起しますか、と訊くと、蒼一は妙に嬉しそうな顔をして頷いた。

風砂は怪訝そうに首を傾げエプロンを取ると、リビングを通ってこの家の主の部屋へ向かい、扉をノックした。もう一人の同居人だ。

「零堵、詩冬さんが」

言葉を言い終える前にいきなり勢い良く扉が開き、わずかに開いた隙間から何かが投げられる。それは風砂の斜め後ろに立っていた蒼一の顔面に凄スピードで向かうが、意外にも蒼一は何事もないかのように涼しげに片手でそれを受け止めた。

受け止めたのはハードカバーの分厚い辞書だった。当たっていたらさぞかし痛いだろうなどと風砂が考えていると、開かれた扉からゆらりと黒髪の青年が出てきた。

「おはよう、零堵君。ご機嫌いかが？」

「最悪だ」

ふざけたように蒼一が言うのを零堵は思いきり睨みつけながらぴしゃりと言いつつ。

この家の主にして風砂達が生計を立てる《記憶屋》の所長、それがこの不機嫌全快の男 雨岸零堵あまぎしれいどだった。外見年齢二十歳前後、長い前髪に隠された黒い双眸は見る者を怯えさせるように底知れない深みを持っており、おまけにややつり目なので見た目の凶暴性は増すばかりである。

そして何故かいつも黒い手袋をしている。

「せっかく親友が来てやってるのに、失礼なやつだな」

「誰が親友だ、誰が。お前なんか知人以下だ。それに来てくださいと頼んだ覚えもない」

頼まれても願ひ下げだ、と零堵が苛々を吐き出すように言うが、蒼一は特に気を悪くした様子もなく寧ろ楽しそうにリビングのソファに座った。

蒼一は零堵の古い知人だ。彼曰く親友らしいが、零堵がそれを認めたことは未だ嘗てない。以前、蒼一がはじめてこの家に来たときは丁度零堵が不在だった為にその《親友》発言をもう一人の同居人と共に真に受けてしまったことがある。その時は、二人そろって信じられないとばかりに目を丸くして、帰って来た零堵を問い詰めたものである。

零堵と蒼一という組み合わせが実にミスマッチだったのである。

「だいたい、今日は何処から入ってきた？ 不法侵入で国家権力に突き出してやるのか」

「台所から。いやーせっかくこんな能力あるんだから使った方が得だろ？」

「……そういうことだったら、俺も容赦なく消すぞ」

一触即発 否、触れるまでもなく爆発しそうな感じだ といった雰囲気が辺りに充満すると、風砂はまたか、と肩を竦めて二人を見た。零堵が消す、と言ったのは比喻でも何でもない。ただし消すのは蒼一自身ではなく“彼の記憶”だ。

彼らは特別な能力を持っている。零堵の能力は《記憶操作》だ。《記憶操作》とは文字通り他者の記憶を操作できる能力で、時に消し、時に改竄する力である。一方で蒼一の能力は《存在の干渉》と呼ばれる。蒼一自身の存在を強めたり弱めたりする、存在を弱めれば気配も希薄になって姿が見えなくなり、更には壁まで擦りぬけられるらしい。先ほど台所の壁から入ってきたというのはその力の所為だ。故に神出鬼没、その気になれば壁に耳あり障子に目あり、である。プライバシーなんてあったものではない。

さしずめ超能力者ではあるが、潜在能力というよりはただの体質と言った感じなので超能力と言うのには少々語弊があるかもしれない。記憶を改竄したり存在の干渉をするなどはすでに一般的な超能力さえも逸脱しているように感じる。

かく言う風砂も能力者の一人だ。その力は《心眼》。生きているものの記憶と感情を読み取ってしまう力だ。普段は決して力が発動しないようにコントロールしているものの、制御出来なかった頃は人前に出ることは出来なかった。人ごみなんて論外で悪意を向けられることに酷く怯えていた。

それを救ってくれたのが、未だ一方的な睨み合いを続けている雨岸零堵である。

彼の心だけは、何故か読むことは出来なかった。

『来たければ、勝手に付いて来ればいい』

そう言われて、風砂は後から拾ったもう一人の少女と三人で生きていくことを決めた。それが《記憶屋》のはじまりだった。

能力で記憶を消したり取り戻したりする仕事だ。一般的には胡散

臭いことこの上ないが、実力は本物だ。

二年前、零堵に遭わなければどうなっていたか分らない。風砂は零堵を尊敬している。が、それと同時に強い劣等感も感じていた。自身と似ている能力、それなのにまるで違う。風砂は見ることにできない。ことで無力感に苛まれていた。

そんな風に見ているのに零堵は優しい、と思う。無愛想で、無感動で、滅多に表情を変えたりしないが、それでも他人のことを考えている。今だって本気で蒼一の記憶を消そうとはしてないだろう……多分、おそらく。

「風砂」

地獄の底から響いてくるような低い声に、考えに耽っていた風砂は驚いて飛び上がりそうになった。

「こいつを追い出せ」

「風砂君はそんなことするわけないよな」

「え、え？」

殆ど同時に自分に言葉が振られ、困惑する頭を整理しようとする。惘然とした態度で言い放つ零堵とにこやかに念を押す蒼一、表情は正反对だが二人の背後でブリザードが吹き荒れているのはまったく同じであり、風砂は思わず悲鳴を上げそうになった。が、ギリギリのところで飲み込んだ。

怖い、しかしどちらに従えば良いのか分らない。家の主として零堵に従った方が良いのか、しかしそれだと詩冬さんにあることないこと暴露されてしまいそうだし……

二つの意見が頭の中でぶつかり合い、拮抗状態になっている。どうしたものかとおろおろしていると、遠くで玄関のドアの空く音が聞

こえた。まさしく救世主だ。

「ただいまー」

「霧香ちゃん！^{きりか}」

部屋の空気をものともせず悠々とリビングに入ってきた少女

霧香に風砂は助かったとばかりに駆け寄った。

^{はるかきりか}

春川霧香はこの家の紅一点にして唯一の肉体派だ。運動神経が優れており、体術も使いこなす。肩より少し過ぎたくらいの手入れなされた金髪とエメラルドグリーンの瞳は蒼一とは違い天然のもので宝石を彷彿させる。この家の誰よりも感性が強く、少々でもないが大雑把なところを除けば普通の女の子に見える。

しかしこの少女もまた、能力者なのである。風砂と同じように拾われた霧香の能力は、『念動力』だ。サイコキネシスと言ってもいいが、物質を動かしたり波動で破壊する能力を持つ。

「霧香ちゃん、助けて……」

「何の話？ 零、風砂ただいま。あ、蒼一さん来てたんだ」

「おかえりキリちゃん。今日はちよつと用事が」

「ないんだろつが。さっさと帰れ」

不機嫌オーラが二割増しで放出される。すると、蒼一は何か含んだような笑みを見せ挑発するように口を開いた。

「そんなこと言ってもいいのかな、零堵？」

「……どういう意味だ」

「今日とある豪邸に“仕事”しに行っただけだ」

「何が仕事だ、こそ泥が」

彼の職業は所謂泥棒。現金には一切手を出さず、珍しいものばか

りを収集しているらしい。最初は風砂達も止めたものの、本人曰く『一番能力を生かせる仕事』らしい。もう何も言つまい。

「酷いなー。それで俺は取るつもりはなかったんだけど、いつの間にかまぎれ込んで……」

がさごそと袋を数秒漁った後に蒼一は一冊の古びた本を取り出した。その刹那、零堵の表情が一変した。古びた本を凝視しながら、そう言うことは早く言え、と手を出す。

まるでおもちゃを欲しがる子供みたいだね、と霧香が言ったのに激しく同意したくなつた。

「ただし」

「何が条件だ」

「そのこの豪邸のセキュリティが意外に凄くてさ、結構な人数に追っかけられたんだよ」

今現在進行中。

本当にそういう事は早く言ってくれ。

「はぁ……つまり匿えと言いたいんだな。風砂、こいつの夕食も追加できるか」

「あ、うん。大丈夫だけど」

「零つてばすつごく態度変わったねー。そんなにその本大事なの？」

「ああ」

霧香が何気なく訊くと、零堵は間髪いれずに即答した。それに驚く。物に執着しない彼がここまで言う本というのは一体どんなものなのだろうか。風砂は台所へ、零堵は自室に行ってしまった後、霧

香は蒼一にその事を問いただした。

「何、そんなに気になんの？ あの本」

「だって零があんなに必死になってるの初めて見るんだもん、気になる」

「あー……と言っても、俺からはちよつと、な」

何とも微妙な表情をする蒼一に霧香は首を傾げる。

「言っちゃいけないことなの？」

「……じゃあ、零堵には内緒でヒントな。あの本には、零堵がずっと探しているものがあるかもしれないんだ」

「ずっと探しているもの？」

まったくピンとこない。それどころか、謎は深まるばかりだ。

「それってどういう……」

言いかけたところで、ピンポンと玄関のチャイムが鳴る。それかなり焦っているのか何度も何度も続けて押されるそれに、思わず眉間に皺が寄る。それに外がやけに騒がしい。

「あはは、もしかして来ちゃったかな？」

「人事みたいに言わないでください！」

「まったくだ」

ばたばたと、面倒臭そうな表情を隠そうともしないで、零堵が部屋から出てくる。

「お前は一応隠れてろ。霧香は一緒に来てくれ、もしもの時は頼む」

「了解」

風砂が台所の方がわたわたとしているのが見える。霧香はそれを見えりながら、玄関の扉を開いた。

1章 日常 (後書き)

はじめまして。椎葉奏という者です。

せっかく連載を書き始めたのできちんと更新出来る様に頑張ります。

2章 雨と小さな依頼人

雨が降っていた。

真夏の煩い虫の声はとつくに聞かなくなり、だんだんと冬が近付いてきた夜のこと。まだ夜中という時間でもないので町の明かりも途絶えることは無いが、此処は閑散とした住宅の跡地である。子供達の遊び場であった昼間とは打って変わって、夜の常闇と静寂に包まれていた。唯一の音である雨音もこの清冽な空間によく調和されている。

この幻想的な雰囲気の中ではどんな生物でさえ存在が赦されないような気さえ感じさせる。神聖というか、決して踏み込んではない領域と言った空気が、ここにはあった。

誰も居ない。

誰も、入ない。

それが崩れたのは、その刹那だった。

こつこつ、というともすれば聞き逃してしまいそうなほど小さい音が、一定のリズムを刻んで聞こえる。それと共に暗闇に白い影がほんやりと浮かび上がってきた。

小さな影だった。

百三十センチほどの背丈に真っ白のレインコートのフードを深く被っている。それだけでは性別や年齢は判断し辛く、漠然と子供だということぐらいしか分からない。

影はきよろきよろと辺りを見回しながら、拳動不審な様で歩いていた。それを不審に思う人間など、無論ここには居ないのだが。

一度、歩みを止める。

「このへんだったはずなのに……」

ぽつりとそう呟くと、再び足を踏み出したのだが、二三歩歩くとまた足を止める。それを何度か繰り返したところで、完全にストツプしてしまった。

「……ユウユウ」

「どうかしたの？」

!

突然背後から独り言だったものに言葉を返されて、影はびくりと大きく身体を震わせた。気配など読める訳も無く、影もまた此処に誰かが居るなんて思っていなかったのだ。

ふと、そこまでして先程からフードを被っている頭にぼつぼつ落ちてきていた雨がなくなっている事に気付く。そしてその理由を即座に理解すると、影は恐る恐る背後の声の主に視線を向けた。

そこには、深い青色の傘を自分に傾け、優しそうな表情を見せる少年が立っていた。

「つたく、は」

だ
うが、
はやく

「また、やってるよ……」

途切れ途切れに聞こえてくる怒声と騒音。一体何をやっているんだか……容易に想像出来てしまう。

風砂は右手に買い物袋、左手に影　小さな少女を連れて自宅まで戻っていた。元々買出しは自分の仕事なのだが、何もこんな大雨の夜に買いに行かせなくてもいいだろう、と少し愚痴っぽくなる。

しかしながら、そのおかげで丁度この事務所を探している少女に会えたのだから、まあ良しとしよう。

こつこつ、と音を立てて階段を上がって行くと、少女が風砂の手を掴む力が強くなる。どうしたのかと言いかけて、すぐに得心がい

く。

あの二人の声や音を怖がっているのだ。

風砂にはもう聞き慣れたもの。それはそれで悲しいが、でも、やはり子供は大きな音を恐れることが多いようなので、怖がっても仕方のないことである。

風砂は、少女を安心させるようににこりと微笑み、そうこうしている間に着いた、我が家の扉を開いた。

「ただい」

「これでも喰らえ」

「え……」

バシャツと大きな音がしたと思うと、次に感じたのは全身に冷たい衝撃が降りかかったことだった。

霧香が奥の方ではつと息を呑むのを聞きながら、状況を一瞬で理解するとだんだん胸の奥底から何かが湧き上がってくるのを感じた。

『あ』

零堵と蒼一が声を合わせる。

それに答えたのは滅多に表すことのない、怒りだった。

「い、いい加減にしてください！」

結局何が起ったのかというと。

またいつものように、零堵と蒼一が喧嘩を始めた。発端は勿論蒼一が零堵をからかうところからだ。無視しておけばいいものの、何故か律儀に言葉を返すのが、零堵の良い所であり悪い所だった。

そうこうしているうちに、いつも間にかヒートアップしていたようだ。霧香が止める間も無く、零堵が蒼一に水をぶっ掛けようと一体いつ用意したのか、大量に水が入ったバケツを蒼一に向かって振りかぶり、

見事に外し、なおかつ命中させた。

丁度水が掛かりそうになったとき、蒼一は《存在の干渉》をしたのだ。そしてそこにタイミング悪く扉を開けた風砂は、元々蒼一が立っていた場所、入り口付近で蒼一の代わりに水を全身に掛けられることになった。

「華城麗乃ちゃんね」
かじょうりの

はい、と霧香が少女、麗乃にココアの缶を渡すと、とまどったような表情をした後、温まっている缶を手にとった。

余談だが、そのココアは怒った風砂が零堵のだったのを取り上げたものだ。零堵は意外に甘党であり、ちなみに蒼一は辛党である。つくづく対極な二人だ。

しかし麗乃は手に取った缶を穴が開くほど見つめるだけで、なかなか開けようとしなかった。

「どうしたの？」

「あ、あの、開け方が分からなくて……」

おろおろしながら理由を話されると、風砂は目を瞠って驚いた。開け方が分からない人なんて初めて見たのだ。ひとまず缶を預かつ

て開けてあげた。

珍しい子もいるんだな……

「それで……」

風砂はタオルで頭を拭きながら、ちらりと掛け時計を見る。時計の短針はすでに十を指しており、子供が、それも小学生が家に帰っていない時間ではない。

「どうして、こんな時間に？ それに」

「どうやって此处を知った」

風砂の言葉を遮るように、零堵の低い声が威圧を含んで紡がれた。彼の声に驚いたのか、麗乃は怯えたように身を震わせる。

《記憶屋》は広告を出していない（表沙汰に出来るわけが無い）上、顧客も殆どが善良な人間とは言えない。麗乃のような普通の子供がこの仕事を知るのは、殆ど不可能なのだ。

「あの、家のメイドさんたちが、記憶を操ってくれる不思議なお店があるって噂してて……」

どうやらこの子は相当お金持ちの家の子のようにだ。日本の一般家庭でメイドが居る家など無いだろうし、先程缶を開けられなかったことを考えると、それは明確だった。

零堵は眉間に皺を寄せると、ややあってから「まあいい」と言った。

「それで、依頼は？」

「このお兄ちゃんは顔は怖いけど、《魔法使い》だから嬢ちゃんの願いもすぐに叶えてくれるぜ」

「あることないこと、余計なことを話すな」

零堵が蒼一をぎろりと睨むと彼は肩を竦めて苦笑する。

麗乃が蒼一の言葉に安心したのか、少し緊張を解いたように力を抜き、一度深呼吸してから意を決して言葉を口にした。

「私の、記憶を消してください！」

その日は彼女の十歳の誕生日だった。

日曜日ということもあって、朝から夕方にかけて誕生日パーティーが盛大に執り行われた。麗乃は父親から贈ってもらったふわふわの髪の人形を片手に持ち、随分とはしゃいだ。

普段は夕食後、宿題をして早々と寝てしまっただが、特別な日だけあってパーティの興奮が冷めきれず、眼が冴えてしまっていた。一時間ほどして結局眠れなかったので気分転換と思い、麗乃は部屋から出た。

ゆつくりと、普段とは違った雰囲気を感じ出す廊下を歩きながら、麗乃はふと駆け出した。普段は決して行けない場所、地下室に行くことになったのだ。父親は絶対に入ってはならないと言っていたし、いつもではメイド達が忙しく歩き回っているのに近づくことすら出来なかった。

少しだけ……そう考え、麗乃は地下室への階段を音を立てないように降り始めた。

半分ほど降りると扉から光が漏れているのが分かった。麗乃は静かに扉に近付き、ほんの少しだけ扉を開けるとそこには異様な光景

が広がっていた。

等身大の子供の人形が無数にあったのだ。

そこまでなら彼女は別段可笑しいとは思わなかっただろう。彼女の父親の人形好きは周知の事実だったのだから。しかしその人形が大きな鉄格子の中にまとめて放りこまれていたら、誰だってその異様な光景に首を傾げるだろう。ましてやその前を白衣姿の男が闊歩していたら。

麗乃が息を潜めてそのまま様子を見ていると奥の方から声が聞こえてきた。彼女は、はっとしてその聞き覚えのある声が近付いてくるのを待った。

死角から現われた人物は、彼女の予想通りの父親と、先程とは別の白衣の人間、そしてその腕に引きずられてきた先程同様の等身大の人形だった。

父親は静かに格子の中を一瞥すると人形を持った男に声をかけた。

「また、失敗でしたか」

「隼人様、申し訳ありません」

「いえ、それよりもより完璧でないと、麗乃も喜びませんから」

突然聞こえてきた自分の名前に驚き、危うく音を立ててしまうところだった。

（人形を作ってる、のかなあ）

父親が再び奥へ消えると、人形を抱えていた男が憤慨したように鼻を鳴らし、鉄格子の扉を開く。

「……あの、狂人が」

苛々したままその人形を他の物と同じ場所に投げ入れると、ガシヤン、と勢いよく扉を閉める。

そのまま立ち去るかと思いきや、男はその鉄格子の扉を蹴り始め、その度に呪詛のような恨みの籠った言葉を吐き出していた。

「……………うつ、あ……………」

男の罵倒に混じって呻き声が聞こえたが、決して男が出した声ではない。麗乃は声の発生源を探し、それを理解したときそこで漸く男の言葉が意味を成した言葉に聞こえた。

「こ、の、失敗作め！」

「うああ……………」

呻き声は彼が怒りをぶつけている鉄格子の中の、人形から発せられていた。

いや、人形じゃない。

あれは、人間だった。白すぎる肌の色、だらりと倒れている様は糸が切れたマリオネットに酷似していて、何より父親が持っている人形と似ていたので分からなかったが、あれは、あれらは人間だった。

怖い！

そこまで考えて麗乃は体が震えるのを押さえ切れなかった。あんな幾人もの人間を積み重ねるようにして鉄格子の中に入れるなんて狂気の沙汰だ。それを平然と眺める人間もまた同様に。

怖い怖い怖い！ あの白衣の男も、積み上げられた人間達も、そして自分の父親さえ。

かたん、と震えるあまり音を立ててしまった。

「誰だ？」

よほど耳が良いらしい男は罵倒をするのを止め、辺りを見回す。それは奇しくも扉の隙間から見ていた麗乃の視線と、しっかりとあつてしまった。

見られた。どちらも同時にそう思った。

彼女は急いで踵を返すと一目散に逃げ出した。

気付かれた。背後で何か言っているのが聞こえたが、彼女はあえて聞かないように耳を塞ぎ、足を動かすスピードを速めて慌てて自室に戻った。しっかりと鍵を掛けて。

「……それからずっと家が怖くて、いつ口封じに殺されるか分からなくて、それでメイドさん達がここの話をしてるのを聞いて……」

「記憶を消しに来たという訳か」

「はい、今日は何か家で騒ぎがあったみたいで、その隙に逃げてきたんです」

「騒ぎ？」

「あー、それ多分、俺だ」

「何だって？」

霧香が質問した言葉を何故だか蒼一が返した。彼は相変わらずへらへらと笑って、いるのに対して、零堵は液体窒素並みの温度の視線を向ける。

「華城ってどこかで聞いたかと思えば、今日俺が仕事に入った家な

んだよね……」

一瞬、沈黙。

そして、零堵は蒼一の頭を思い切り殴ると仕事という言葉に？マークを出している麗乃を放ってずるずると台所まで引きずった。

「痛ってーな、頭が可笑しくなったらどうするんだよ、レイちゃん」
「安心しろ、お前はどう頑張ってもこれ以上可笑しくはならない。」

……盗みに入った家の人間の前で堂々と公言する馬鹿がどこにいる」
「まあまあ、ていうか俺を庇ってくれるんだなー、零堵君。ホントにお人よしというかなんというか」

「黙れ、お前と一緒にされるのが嫌だったただけだ」

冷てー。と蒼一がシニカルに笑うのと同時に服のポケットからピピピと電子音が響いた。

「あ？ 誰だろ」

蒼一は携帯電話を取り出すと、そこに表示されている名前を見て訝しげに眉を潜めた。零堵はなんとなく相手が分かり、興味を無くして（絶対に興味があつたなんて言わないだろうが）リビングに戻った。

「たく、面倒なこと押し付けやがって」

「お母さんが死んでから、お父さんが変わったの。でも優しかった

し、普通にしていたけど、この間から怖く見えてきて、あの白衣の人がお父さんに言ったかもしれないし」

風砂と霧香は麗乃の話を聞いていた。

「それで、地下室で見た記憶を消して欲しかったんだね」

零堵が戻ってきたのに風砂が気付くと、彼が座るのを待ってから「記憶、消してあげない？」と言った。
が、零堵の答えは酷く淡白だった。

「駄目だ」

「え……」

麗乃はショックを受けたように顔を蒼白にしながら俯いた。何せ命が掛かっているのだ。期待を上乗せしてきたに違いない。

「レイ！ どうして？」

「考えてみる。ここで記憶を消したところでそれをどうやってその父親や白衣の奴に証明するつもりだ」

「あ……」

「無意味だ。他人の記憶を見られるなんて俺か……風砂ぐらいだからな。だから今、現状では何の解決にもならん」

正論だった。ここで彼女が記憶を失ったところで得るものなどひとつもないのだ。

麗乃がそれを理解してそして更に困惑したとき、玄関のインターホンが鳴った。

「今日は客が多いな」

「もしかして、夕方の」

風砂は自分で言った言葉に、はっとした。夕方の奴等は蒼一を追いかけてきたのだ（ちなみにその時の追っ手には蒼一が居ないことを無理矢理納得させて帰した）が、その追っ手は麗乃の家の人間だ。もし、蒼一を見つけるついでに麗乃を発見されてしまったては最悪だ。霧香も零堵もそれに気付いていたのか、真剣な表情でどう出るべきなのか考えようとしていた。

もう一度、インターホンが鳴る。

「おいっ、蒼一いるんだろ！ とつと出て来い！ お前の所為で俺がどれだけ残業してると思ってやがるっ」

ドアの向こう側から聞き覚えのある大声と、リズムカルにドアを叩く音が聞こえた。

「……風砂、とりあえず静かにしてもらえ。俺はアイツを捕まえてくる」

「うん……」

緊張感が一瞬にして氷解する。まだ現状を理解仕切れていない麗乃は霧香に任せて、風砂は玄関の戸を開けた。そこにはやはり見知った顔。

「葉月、蒼一はいるんだろうな」

「……お願いですから静かに来て下さい。何時だと思ってるんですか……」

風砂はあえて質問には答えず、目の前の男
鎖神深哉さがみしんやを家に上げた。

能力者といえども、法律を守るのは当たり前だ。しかしながら、例えば蒼一のように能力を使って犯罪を起こす人間もいる。が、普通の警察が能力者に対抗するのは少しばかり荷が重過ぎる。そこで設置されたのが、《能力者対策機関 capacity measure institution》通称CMIだった。

警察官から構成されているが、その力は独立しているため、さまざまな非法な手段を実行できる。

CMIでは危険だと判断された能力者に担当者をつけ、出来うる限り監視させて犯罪を防ぐものだった。

しかし、蒼一の能力のように監視の目を掻い潜ってしまう能力者は実に厄介なものだ。

鎖神深哉はそんな不幸な役回りになった詩冬蒼一の担当者だった。三十台半ばといった様子で常にいつもサングラスを掛けている（今は夜なのに見えるんだろか）。

風砂が深哉をリビングへと連れて行くと、丁度零堵が蒼一の襟首を掴んで連れてきたようだった。

深哉は零堵から蒼一を引き渡されるとがしりと腕を掴んで凄い形相で凄んだ。

「蒼一、お前自分がやったこと、分かってたんだろうなあ！」

「深哉さん、娘さんは元気？」

「ああ！ 最近自転車に乗れるようになって、ますます可愛くなっちゃまって……って、話を逸らすな！ お前の所為で深波に会う時間みなみが無くなっちゃったじゃねえかあ！ もう十時半だぞ、寝てるに決まってる！ お前の所為で俺はなあっ！」

深哉は自他ともに認める親馬鹿だった。

彼には深波という小学一年生の娘がいる。自分の名前を取ってつけた名前は自慢らしい。深哉がCMIという危険な仕事に就いているのは彼女の事が理由らしい。

鎖神家は父子家庭だった。母親は深波を生んですぐに亡くなっており、一人で育ててきた。おまけに深波は幼稚園の頃から病弱で、なんでも詳しくは聞いていないが思い病気を抱えていたらしい。今は治まっているが、治療費をはらうためにわざわざ危険だが給料の高いこの仕事に志願したらしい。

「とにかく、本部まで来てもらうからな」

深哉はそう言つと、零堵のように蒼一を引きずり「邪魔したな」とだけ言つて玄関から出て行つた。

嵐が去つたようだった。

それと共に先程の重苦しい空気が戻ってきてしまった。

「麗乃、だったか」

零堵に名を呼ばれ、麗乃はびし、と背筋を正す。そうしたい気持ちには分らない、と風砂は密かに思った。

「はい」

「お前は、何を望む？」

「え？」

「ここが、仮に記憶屋でなかったとしたらだ、何でも叶えて貰えるとしたら、お前は何を望むんだ？」

「何でも……？」

麗乃は考えるように目を閉じたが、ややあってから目を開け、しっかりと零堵を見た。

「あの地下室のことを、お父さんが何をやっているのかを知りたい。あんな……あんな酷いことをやってるお父さんを止めたい！」

「もしそれで、父親が警察に捕まってもか」

「……………はい」

お父さんを止めたいから、と麗乃ははっきりと言った。

「……強いね」

「え？」

霧香が何か言ったのを凧砂は聞き取れなかった。

零堵は、相変わらずの無表情で頷くと霧香の方を見た。

「霧香、情報屋に連絡入れとけ、明日そっちに行くって」

「え、じゃあ零堵」

「報酬はそれ相応に頂く。それに……今更ほつとけないだろ……」

やはり零堵は優しいと思った。蒼一に言わせればただのお人よしなのだが。

ちなみに零堵が霧香に電話を頼んだのは、彼が機械類の扱いが酷いからだ。凧砂もあまり得意ではないので必然的に霧香に回ってくる。家事は凧砂が、パソコンなどの機械類は霧香が、そしてその他の交渉などを零堵がすることによって、この記憶屋は運営されている。

「よろしくお願いします」
「依頼、承りました」

物語が、紡がれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5434c/>

記憶屋

2011年1月28日10時41分発行